理系のとりっぷらいふ

佐喜真 寿々子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理系のとりっぷらいふ

【Ｎコード】
Ｎ９４９５Ｙ

【作者名】
佐喜真　寿々子

【あらすじ】
理系の大学生　冴木　琴子は不思議なおばあちゃんの家で不思議な通路を見つける。
するとおばあちゃんがよく話してくれた世界に飛ばされて？
おばあちゃんの教えを元に突き進んじゃえ的な作者的には王道満載にしたつもりの駄文です。

1　ププローグ

「ことー、合コンいかなーい？」

「ごめーん、今日ちょっと様子見たいのー。」

冴木　琴子。２２歳。理系が発達している某そこそこ有名な大学に通う、研究暗記大好きな変人。
昔から暗記力がよくておばあちゃんの大きな菜園でハーブの効能や薬草の効能を覚えていく内に将来は理系になると決めていた。

その名前の通り、竪琴と琴が得意だった。

おばあちゃんはよく、不思議な世界のお話をしてくれた。

魔法があって、綺麗な世界。

おばあちゃんはおじいちゃんがなくなってからすこしすると、忽然と姿を消した。

私のお父さんが一生懸命探して、お母さんとお父さんのおかあさん、もう一人のおばあちゃんがいっぱいいないた。

暫くして、おばあちゃんは帰ってきた。

でもその後、すぐに眠ってしまった。

眠ったまま、天国へ行ってしまった。

明日は久しぶりに講義がないし、先輩に世話を頼んでおばあちゃんの菜園にいくつもり。

おばあちゃんは小さな山を買い取った。

田舎の山を。

その中腹くらいに建物と菜園があった。

私は終電に揺られながら、思いに耽った。

おばあちゃんとおばあちゃんはとても仲良しだった。

レイラさん、麗子さん、といっつも笑あって。

おばあちゃんはなぜか、小さい時の写真がなかった。

写真にでてくるようになったのはおじいちゃんと結婚してからだった。

おばあちゃんは日本人だと言い張っていたけど、白い肌に青いたれ目は外人だった。

それに、ちょっとだけ、耳の形も違った。

私は白い肌しか、おばあちゃんに似てない。

『ことちゃん。容姿よりも内面よ！イケメンなんてぽいして、平凡に走りなさい！』

わたしの容姿のことをいったのに、なぜかずれている。

ふふふ。と笑ってしまうわたしはどうみても不審人物だろう、それかよっているか。

自分の肩にかかった内側にむかって伸びている髪をおばあちゃんは褒めてくれた。

真っ直ぐじゃなくて内側に。

おばあちゃんの髪は、クルクルしてて、羊の毛のようだった。

それがテンパというものよ。

とお母さんとおばあちゃんは笑ってた。

おかあさんの髪もクルクルしてたから。

ねぇ、おばあちゃん。おばあちゃんは今、どうしていますか？

ふたりのおじいちゃんとおばあちゃんは、白い雲の上で、お茶会をしてそうだ。

電車の最終一個手前で降りる。

そこから深夜特急バスに乗る為に。

夜が明けていく

私はブルブルと震えるケータイを見つけた。

「はい、もしもし、…。」

わたしの親戚は、いなくなった。

麗子おばあちゃんは、心筋梗塞で、

お母さんとお父さんは交通事故に巻き込まれたそうだ。

「・・・。なん。で。」

私は携帯を放り出して山を駆け登った。すぐに息切れしたけど、それでも登った。

やっと見えた緑に囲まれたお屋敷。

これは嘘、今日ここで落ち合う約束、してるもん。

わたしは汗をかいていた。

悪夢から目を覚まそうと、自分の部屋に駆け込み、柔らかい素材の洋服を掴んで、お風呂に湯を沸かし、シャワーで、全てを忘れようとする。

開放的なお風呂に入ってると、さっきのは悪夢、落ち着いて、と自分の声が聞こえた。

わたしは洋服を着るとベットに倒れこむようにして眠った。

「ん、ぅぅ。」

頭痛がする。体が重い。髪が目にかかって邪魔。

わたしは髪をセットすると不自然なことに気づいた。

なんでおばあちゃんの部屋？

おばあちゃんとわたしの部屋はよく似てるし、隣だけど、決定的に違うところがある。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

駄文をお読みくださりありがとうございます。初投稿で、使い方がいまいちよくわかりませんｆ＾＿＾；）

2　ププローグ（前書き）

いやー、前回、長くなってすいません。m（＿＿）mめっちゃ長かった。

2　ププローグ

それは一つの大きな箪笥。

わたしは無意識にその大きな箪笥に近づく。

「あれ？なんだろう。」

キラリと何かが箪笥の中で光る。

手探りで掴んで、手繰り寄せると

【ガゴッ】

……え？今不吉な……

【ゴト】

と箪笥がズレる。

そこには

壁に小さなドアがありました。１３０ｃｍくらいの。

『女は度胸よ！』

頭の中で蛇がでてきたときにいったおばあちゃんの声が聞こえる。

わたしは恐る恐る進んだ。

３分もしたろうか、ようやっと前が開けてくる。扉は小さかったけど、中は縦幅があった。

暗い石造りの廊下をあるいていると、孤独感に溢れる。

「おばぁちゃあーん。。。。」と、半べそで言って見る。

壁にこだまして、虚しくなった。

「あ、」

なんか、嫌な予感がするなぁ。。。。

ボトッ！

放りだされた白い世界。

そして、

またもや、

ーボトッ

2　ププローグ（後書き）

進まないーーー（ーー；）

3　パジャマで落ちました。（前書き）

いや、ほんと、グダグダ駄文。。

3　パジャマで落ちました。

草の上に放りだされた

「って…　　えええええええええええええええええええええええ
ええええ!?」

「わたし、パジャマなのに!?」

そこかいっ。と突っ込みたくなるが、この理系のおとぼけさんは本気で困ってる。

パジャマでほうりだされて。

ベージュよりやや白い絹で出来たワンピース、

裾にはアジアンな茶色い刺繍がしてある。

そして羊のスリッパにふんわりピンクのバナナクリップ

可愛らしい少女の寝起きのようだが、２２だ。

背が１６３ｃｍでも２２だ。
流石に恥ずかしいのだ。
「ていうか、ダルクなーい？」
さっきまでのだるさが一切ないのだ。
羊のスリッパでは走ることができないのに、無謀にもスキップしようとしたら
躓いた。
転げ落ちた。
「イタタタタ。。。。もー、いったいなぁ！」
とブツブツいいながら歩く。
哀れな羊はボロボロで、ワンピースには泥がついただけだが、羊はほんと、ボロボロ、木の枝やらなんやらにひっかかったのだ。

今が春だったことに感謝感激だ。

秋であれば落ち葉やらなんやらでもっっとひどくなっていただろう。

暫くすると小さな集落があった。

3　パジャマで落ちました。（後書き）

ひーーー。やっとププローグ終わったよぅーー。

因みにこの世界は一月だいたい６０日あります。

4　順応能力は高いんです。（前書き）

マジ駄文Ｎｏｗ―「―○

4　順応能力は高いんです。

2ヶ月後（113日後

「コトー！」

「ボォェフ！」

と鈍い音を立ててベットの上にダイブした少年ー

「色気ねぇなー。」

「るっさいわクソガキ！レディの部屋に、ベットに毎度毎度とびこむなっていってるでしょー？」

「メシできたってー。ポタージュにロイブの蒸し焼きにリイモ・シュッガだとよー！」

ロイブとはこの時期とれる川魚なのだが、ぷりっぷりでアマーイ、鮭の食感がエビに、味がウニのような美味しい食べ物で、リイモ・シュッガとは里芋のような芋を蒸して砂糖をまぶしたスイーツだ。

「ママンのポタージュ、美味しいのよねー。」

恐らく、リイモで出来たちょっとネバーっとしたポタージュだろう。

「それより、リュイ、ヒナミちゃん振ったって本当？」

リュイは今お世話になっているラグズドウス家の一人息子で、現在１６歳だ。

時の流れが違うので私はいま２０だ。ヒナミとは１６の可愛らしい女の子だ。

ちょっとお嬢様だけど。。

リュイ、ことリュカス・ラグズドウスはほんと美形だ。

逆3角の小さな顔、大きな青い目、金色にひかる髪。

身長は１６８くらいなのに行動ががき臭いのだ。

ベッドダイブするわ仕事中にちょっかいだすわ。

槍が得意でかっこいいのに。

「俺にはコトコがいるからな。」

「シスコンも大概にしてねー。」

ヒナミちゃん、可愛いのに…

「コトおはよー？」

と満面の笑みでというか、ヘラヘラしているパパン。

「コトちゃんー、オーブンが壊れたぁー。」とベソ書いて泣きつくママン。

そして修理するわたし。

というか、ネジが緩んだだけなんだけど。。

「コトちゃんー、お風呂が壊れたー！」

「コトちゃん！！どうしよう、お花が枯れちゃうっ！」

「サエキ！！猫が変なものたべたーーーーーーー！」

そういう依頼を解決しているのが

コトコ・サエキ　だ。

「あー、この猫、消化不良ね、４日間、一日2回のお薬ねー。昼過ぎにきて頂戴。」

「この花、単に栄養不足よ、１０日分の栄養水つくっといてあげるねー。」

ウチにはだいたい、生物関連が多い。

それに安くていい薬作ってくれると大評判。

香水から毒消しまで、元の世界の知識があってよかったー。

４　順応能力は高いんです。（後書き）

リュイ君、フラグたってます。これから国とか関わって王様やら王子様やらいろいろでてきあます。

5　いきなり引っ越します。（前書き）

誰けか私に文才をー。。。。因みに私はケータイでもパソコンでもなくｉＰａｄでうっていますうちずらーーーーい。おとぼけてこないので、タイトル変更しました。

5　いきなり引っ越します。

「ことちゃん。悪いんだけど、ウチ、引っ越すことに…。」

いきなりなんですか。この展開。

夕食のデザート、スフレをたべている途中に行きなり切り出されました。ハイ。

「タケフミさんがねぇー。」

タケフミ＝パパンの弟さん

「閃いた！って放浪にでて。。」

「そうなんだぁー。あの人、放浪癖あるからねぇー。」

「…。あーで、進学も近いことだし、王都に引っ越そうと思うんだ！」

「なんでいきなり引っ越すことになるのかわかんないなぁ。」

「…タケフミん家にちょっと事情があってな。でな、」

「ルチアーノさん、ほんとのこと言いましょう。」

「…。宰相にバレタ。」

「…。あー。」

ルチアーノパパンは元隣国の騎士で、上位だったぽくて。

「タケフミさんが、放浪の代わりに喋ったのよー。」

あー。うん。お土産、欲しいなぁ。

「父さん、俺、コトコがいかないならいかねぇぞ。」

「王都ってどこの王都ー？」

「ファオリア。」

ファオリアてことはこの国の王都か。パパンは競争率高いらしくて。。。

「ふぅん、いいんじゃない」

ってまてマティ！

「リュイってレヴェルの学校志望じゃなかったっけ？」

「「あちゃぁー」」

リュイは帝国レヴェルの帝都の超ハイグレ校志望じゃなかった？

「私、帝都には絶対いかない！」

だって

だって

「変態魔法使い志望がいんじゃん！」

ちょっと前まで、草に話しかけたり、私にやたらなついてる変態がいた。

手を繋ぎたがり、ほっぺにチューしたがり、

…お風呂覗いたり…

ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝１０分後ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝

要約　私が行きたがらないから嘘をつきました

「ま、いいや、嫌いて程じゃないし。それより、明日山いってくるーおやすみー」

歯磨きシテネヨーット。。

歯磨きっつっても、ある粉塗して布でキュッキュ拭くだけ！

あとは水でグチュグチュペッ！

お風呂は2日に一回。井戸から川から水をひいてくるんだけど案外便利でポンプがあってポンプに重い石置いとけば水たまる。シャワー浴びれると近代的なんだよねー。

最近は薬草と花を乾かしていれる薬湯もうれてるんだよねー

石鹸は高いからシャンプーみたいなの作ったらバカ売れして、

ハッカ入りのなんてもー超安定商品。

ビバ！おばあちゃんの菜園ライフ！

6　忘れました。（前書き）

お、お気に入り登録アザーーーーーーーーっす＼（／／∇／／）＼
ヤバイです、涙です（本当。

ていうか、見てくれてありがとうございまっす。ていうか、コトコ意外と守銭奴です。鈍いです。長いものには巻かれろ主義です。やや天然です。

6　忘れました。

「うーさーぎーおーーーーいしかーのやまーーーー！こーーーーぶーーーなーーつーーりしかーのかーわー。」

歌を歌いながら山に入るのは蛇や熊に私はここにいるのーて教えるため。

噛むカムレモンが恋しくなってきた。。

あの酸っぱいキュートなあれ、食べたいなぁ。

そう！レモン！

高いんだよねー、南にあるから。

蜂蜜付けにレモンティー。レモンタルト！

うう。アイラブジャッポーネ！輸入万歳！空輸万歳！

（注意※この世界にも輸入はあります。たんにレモンは稀少なだけです。レモンに似た物があるのですが見たことないだけです。）

ていうかさー、トリップしたならもっと植物研究したいなぁー。遺伝子、クォーク、あーーー！焦れったい。

（注意※コトコは将来有望な遺伝子研究員です）

なんでもっと研究設備がいいトコに落ちなかったんだろ（経緯丸忘れ。

あ、あと半時で日没だ、かーーえろっっと

「ゆうめーはいいまあもーめえぐーーうりいてーーわーすれがーたきふるー。さと…」

故郷、どうなんてんだろ、ま、いっか。

6　忘れました。（後書き）

お気楽です、檄お気楽です。マジすいません。次話めっちゃ進みます。

7　人と馬、拾いました。（前書き）

だれかぁーー、文才ぷリィズー

7　人と馬、拾いました。

ん？なんか、黒い馬と変な人が倒れてる。

馬に一本、矢が刺さり、人には3箇所、かすり傷があったが毒が塗りこまれていたのだろう。かなりくるしそうだ。

「んー。いま持ってる毒消しは一つなのよねぇー。馬のほうが荷物運べるし、馬のほうがいいっかぁー」

おばあちゃんいってたもん。役に立つほうを先に助けなさいって。

ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝「（；´◇｀）」３０分後。

馬はちょっとよろよろしてるけどなんとか人を運べそう。

馬に人を乗せて「いこうかぁー。」

って。。。日没まであとちょっとしかない！！

ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝「（；´◇｀）」１０分後

「コト！遅えぞっ！ってそれどうしたんだよ！！」

と怒っているリュイは無視して。

手当手当。。

「リュイー、この馬馬房につれてってー。」

コイツは。あー。かすり傷が化膿したりしてる。

「ゲッ。」

今更だけど、今更だけど。

イケメンなんですが。。

ミルクティー色の髪に茶色い目。かぁいいーー！

ってそうじゃないって。

ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝「（；'◇'）」2日後

ウトウトとしていると。

ーガバッー

と大きな音たてて起き上がった

「あー、起きましたー？」

「おっおまえはだれだっ。」

「可愛い坊やがお前なんて言葉、使っちゃメッ。」

「ボクは21だが」

「え、」

私より歳上ーーーー？

「童顔なんだねぇー。あ、とり薬草粥のもっ。ねっ？」

「…」

ミルクティーの髪を長くして後ろで縛ってるとこをみれば貴族かなんかでしょう。

「ここは何処だ。」

「村ですが？」

「…、粥を飲もう。」

ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝「（；゛◇゛）」３５分後

「じゃああなたの名前はアリエスでファオリアにお家があるのね？」

「ああ。」

ファオリアはここから2日だし、見物がてら行ってくるか。

「あと3日したらつれてって上げる。」
「…お前、ボクのこと、知らないのか？」
「初対面ですが？」
「…そうか。ふむ。ボクのことはアルと呼んでくれて構わない。」
命令口調だなぁ。
「リュイー。」
「なんだよ。」
なぜか扉の外で不機嫌なリュイに話しかける。
「ママンに日持ちのいい食料４日分２つ作ってもらってー。」
「は？なんでふたつ？」
「私もいくから」
「はぁぁぁぁ？？！！じゃあ俺も行く！」
「どうぞご勝手にー。旅費自腹ね。」

7　人と馬、拾いました。（後書き）

やっとここまですすんだ

8　中継でお伝えします。（前書き）

マジ急展開ですいません。

8　中継でお伝えします。

「気をつけてー。」

と見送られるけど、2週間くらいで帰って、ママンとパパンと王都で落ち合う予定。

「アルー。ホント、大丈夫ー？リュイもー謝ってー。」

アルが今日、出発準備中にリュイと喧嘩したらしくて、リュイも辛そうだけど、アルは汗ダラダラ。

「リュイも頑張ってよー。グリズリーがきたら追い払ってー。」

「「グリズリンてなんだよ。」」

サエキアナが中継でつながっています。サエキさーん？。

はい、現場のサエキから中継でお伝えしますこの世界ではグリズリーはいないようです。そしてグリズリンに変換されるようです。以上、現場からお伝えしました。

と、脳内でニュースの撮影の一コマが繰り広げられる。

いや、ね、ホンの出来心ですよ。はい。

そして今更ながら、グリムリンてなんだろ。と思考する。

ていうかわたし、基本臆病で控えめなのにこの世界にきて変わったなぁ。強くなったなぁ。

色んな意味でｂ

鍛えられたのか。

そうなのか。

腹筋はどうなったかな。毎日毎日ベッドダイブされてるし、実は強くなってるんじゃね？（口調もヤクザっぽくしてみたっ。

「コトコ、もしなにかあったら人であれば鼻を狙うんだ。鼻は急所だからな。」

「へぇー。」

実践される前にリュイが片付けるとおもうけどね。

「ソイツがイキナリ襲って来た時とかな。」

リュイの視線はアル。

「ボッ、ボクがそんな貧相な板になんで手をだすんだイッ？」

「へぇー、貧相な板ねぇ。」

ーグチャッー

「ウッ。」

「へぇー、ホントに凄いのねー。」

アルは顔を抑え涙がでる。う、ちょっと罪悪感。

っでも、貧相な板。。。。。。。

「お子ちゃま体型きにしてるんだからぁっ！」

「おっ俺は好きだぞ。むっ胸なんて脂肪じゃないか。スリムでいいぞっ。」

スリムなのにくびれがないのよぅーーーーー。クソッ。

8　中継でお伝えします。（後書き）

＞ａ　ｈｒｅｆ＝”ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｌｐｈａｐｏｌｉｓ．ｃｏ．ｊｐ／ｃｏｎｔ_ａｃｃｅｓｓ２．ｐｈｐ?ｃｉｔｉ_ｃｏｎｔ_ｉｄ＝３９４０１７９３７”　ｔａｒｇｅｔ＝”_ｂｌａｎｋ”＜＞ｉｍｇ　ｓｒｃ＝”ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ａｌｐｈａｐｏｌｉｓ．ｃｏ．ｊｐ／ｃｏｎｔ_ａｃｃｅｓｓ．ｐｈｐ?ｃｉｔｉ_ｃｏｎｔ_ｉｄ＝３９４０１７９３７&ａｍｐ；ｓｉｚｅ＝８８”　ｗｉｄｔｈ＝”８８”　ｈｅｉｇｈｔ＝”３１”　ｂｏｒｄｅｒ＝”０”＜＞／ａ＜よかったらクリックおねがいしま

王道詰め込みたい！

実は作者、ニュースモノを書きたくなって。。スマン。コトコ。そして間違ってるぞ！（間違わせた奴

9　色んな意味でカッチャイマショウ（前書き）

色々調子にのってます（おい。

いいもーん、私アホだもーん。

9　色んな意味でカッチャイマショウ

アルはまだ鼻を抑え込み、私を睨みつける。

すると

ーガサガサッー

サッっっとリュイが身構える。

でてきたのは。

「なにこれぇーーー！！かぁいいいいいい？」

小さな物体というか、

マルチーズよりちょっと小さいくらいの動物。

スベスベと水色に輝く鱗。

ビー玉みたいな濡れた金色の瞳。

白い小さな角。

ちょこんと生えた尻尾。

四肢は小さい。

「ドラゴンの赤ん坊だな。」

「ドラゴンの赤ちゃん？おいでーー。こっちにおいでー。」

私は馬からおりて腰を落として近づいて行く。

「やめとけ、危険だ。」

「そうだ、第一親が探しているだろう。見つかったら一溜まりも。。。。」

「んー、、そうなのー、よちよち。」

ドラゴンは何時の間にかコトコお腕の中に収まり、ブンブンと尻尾をふっている。

「ママんがにぇ、しんじゃたの。でねぇ、イキロ、悲しむんじゃねぇわボケぇってゆってね、にがしてくりぇたの。」

と舌足らずに一生懸命喋り、コトコになついてる。

2人はなにこの子、なんか手懐けてるし、末恐ろしー。と畏怖の目で見てるのもかかわらず、

「そうなのー、お名前は？」

「ルビィ！でもねぇ、ママんにはルーってよばれててゃの。」

「ルー君ていうのねー。」

「コトコだいしゅきー？」

なにこの子、本気でー手懐けたよ、高貴なドラゴンを！！とー、本気で畏怖し始めたアルとリュイだった。

「でねぇー、ママンねぇー、何しとんじゃワレェッって強かったんだよぉー、だからにぇ、ルーも強いんだよー。」

コトコはルーの母親は関西弁なのね、とーなっとくしていた

「てことで、この子、私のペットね！！！」

色んな意味で負けました。コトコ、あんたはスゴイ。

ｂｙアル＆リュイ

そして知らずのうちに色んなモノに色んな意味で勝っているコトコであった。

9　色んな意味でカッチャイマショウ（後書き）

ファンタジー＝ドラゴン、これお約束！

勝ってと飼ってをかけますた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9495y/

理系のとりっぷらいふ

2011年12月1日22時45分発行